

## はじめに

はるか昔の話になるが、1980年代半ば、日英語比較研究の一環として、語の連想・含蓄や連想調査の手法などに関する特集記事が英語教育関係雑誌に掲載された。その後「英語連想辞典」の出版を待望する声も一部には聞かれたが、結局、明確に「英語連想辞典」と銘打つ辞典の出版はないまま現在に至っている（僭越ながら筆者は実在人物や架空のキャラクター・地名・商品名など固有名詞を取り上げて、2005年に『アメリカン・イメージ連想事典』（研究社刊）を著している）。

本書は堅苦しい専門的な辞書ではない。1100語ほどの、固有名詞を除く日常英語の名詞を中心に取り上げ、その語に接した場合、一般の英語国民がどのような事物を思い浮かべるか、どのような語・表現を連想するかについて手短かにそのイメージを記したものである。日本語で言えば、一例として「ひばり」についてであれば「麦畑などにすむ小鳥の名。春、まっすぐに空高く上がり、たえまなくさえずる」といったイメージ説明が国語辞典（『三省堂国語辞典』第7版）に見られるが、同様の観点で、本書はできるだけ多くの日常英語の名詞について、英和辞典の通常の語義説明ではカバーしきれない、連想イメージの記載に努めたつもりである。

筆者は本書を著した趣旨を以下のように考えている。こんな些細な、と思われる向きもあろうが、語の連想・イメージを把握することによって、読者は日米あるいは日英米の日常の生活習慣・文化の差に気づかれるかもしれない。たとえばわが国であれば、少年の理想の職業といえばプロスポーツ選手、ITプログラマーなどがランキングに登場するであろう。ところが何人かの米国の友人に確かめてみると、米国の少年（7歳-11歳くらい）が最も憧れる職業は消防士（firefighter）であるようだ。ほかにもピクニックを台無しにして悪者扱いされるのはアリ（ant）、パンケーキ（pancake）はふつう朝食の食べもの、prune（西洋スモモ）に対して抱く米国人のイメージ、barber（理髪師）はおしゃべり等々、本書を一読されると予想外の英語の連想・

---

イメージに出会う場面があるかもしれない。また、昨今海外ドラマのテレビ放映も盛んである。本書から得たささやかな知識が、ドラマのより生き生きとした理解に役立つ可能性もある。結論的に、日常語の連想・イメージを知ることによって、英語に対してカジュアルな親近感が増し、ひいては慣用句を含む語彙力アップにも資するのではと考える次第である。取っつきづらい辞典ではなく、気軽な読み物として、本書をどのページからでもお読みいただき、楽しんでいただければ幸いである。

終わりに、語のイメージに結びつく多くの文例の作成に当たっていただいた米国の友人、テリー・マクウィリアムズ氏、本書の企画段階から事細かに相談に乗っていただいた三省堂辞書出版部の西垣浩二氏、安藤まりか氏に心から謝意を申し述べたい。

2017年12月

編著者